

ライティングセンター運営上の現状と課題

～青山AWCの立ち上げから1年間の量的データにもとづく分析～

小林 至道[†], 中竹 真依子[†]

抄録 本稿は、青山学院大学青山キャンパスに新設されたアカデミックライティングセンター（青山 AWC）における実践を事例として取り上げ、その利用のされ方の特徴を描き出すことを通して、立ち上げから1年間のライティングセンター運営上の現状と課題について考察することを目的とした。分析には、青山 AWC における個別相談の後、チューターが記録し蓄積している「支援履歴」を用いた。本稿の結論として、青山 AWC の現状は、国内他大学ライティングセンターと比較しても、順調な立ち上げ期を経ていることがわかった。一方で課題は、利用促進のための授業担当教員・他部署との連携、利用者のニーズに対する相談対応枠数の配分にあることが明らかとなった。

キーワード：ライティングセンター，運営，アカデミックライティング，支援内容，相談内容，量的分析

1. はじめに

1.1 本稿の目的と研究背景

本稿の目的は、青山学院大学アカデミックライティングセンターで収集した量的データの分析を通して、その利用のされ方の特徴を抽出し、立ち上げから1年間の運営上の現状と課題について考察することである。

「ライティングセンターとは、いったい何をすると、何ができるところなのか」。ライティングセンター発祥の地であり、大学ごと、図書館ごとに同センターを有することが当たり前な米国とは対照的に、ライティングセンターおよびそれに類する支援機関を有する大学が決して多くはない日本の現状では、先に挙げたような質問を、学内外の教職員から投げかけられる機会が少なくない。このことは同時に、同センターの利用者目線での理解が、学内外でまだ十分には得られていないことを意味する。ともすれば、「ライティングセンター」という言葉だけが独り歩きし、「あそこは添削をしてくれるところ、ネイティブチェックをしてくれるところ、代わりにレポートや論文を書いてくれるところ」と都合よく解釈、定義されたうえで、利用者がライティングセンターに訪れるという現実がある。ライティングセンターを運営する立場からすると厳しい現実であるが、その原因の一端が、当のライティングセンター側にあるという事実も否めない。なぜなら、「ライティングセンターとは何をすると、何ができるところなのか」をデータや事例でもって

実証的に明らかにし発信するような先行研究が、管見の限り、これまであまりに不十分だからである。「物事は始めが肝心」とはよく言われることであるが、ライティングを支援する組織の立ち上げから、その運営を軌道に乗せていくためには、どのようなデータを取り、どう分析しながら組織の運営をしていく必要があるのかという点は、先行研究を概観する限り見えてこない。

こうした背景を踏まえ、「日本の大学におけるライティングセンターでは、どのような支援を行っているのか」、そこでは「利用者と支援者の間で、どういうやり取りが生起しているのか」という点に関して、可能な限り具体的なデータにもとづきながら描き出すことを通して、まずはライティングセンターの利用状況を開示し、その実像を広く共有することに意義があるのではないかと。以上が著者らの研究上の現状認識である。

そこで本稿では、青山学院大学に新設され、著者らが所属する青山キャンパスアカデミックライティングセンター（以下、青山 AWC）を事例として取り上げ、立ち上げ当初から一貫した方法で収集している量的データの分析にもとづき、ライティングセンター運営上の現状と課題について考察することを目的とする。

1.2 青山学院大学 AWC の概要

青山学院大学では、授業外でのライティング支援を行う機関として、2017 年 10 月にアカデミックライティングセンター（以下、AWC）が新設された。同年 11 月末から青山 AWC においてライティング支援を開始し、本稿執筆の 2018 年 12 月時点で 2 年目を迎えている。2018 年 4 月には相模原キャンパスにも AWC が新

[†] 青山学院大学アカデミックライティングセンター

設され、現在は2つのキャンパスのAWCにおいてライティング支援が行われている。著者らは、青山キャンパスの支援現場に常駐し、その運営を担う専任教員であり、本稿が依拠するデータは青山AWCで収集されたものに限定される点を、予めお断りしておきたい。

AWCでは、「自立した書き手」、「国際的に通用する文章の書き手」、「普遍的な書く力を有する学生」の育成を目指している[1]。支援方針は、先行する他大学ライティングセンターに倣い、対話を通して利用者である学生自身の気づきを促すスタイルとする[2][3]。換言すれば、AWCは、添削やネイティブチェックを行う場所ではなく、ライティングのプロセスにおいて、書き手である利用者と読み手である支援者が「対話」を通して一緒に文章を検討し、文章の問題点はどこにあるのか、どうすればよりよい文章になるのか書き手自身が気づき、考える支援を行う場所である。このように、ライティングのプロセスを支援するAWCでは、構想、執筆、推敲のいずれの段階の相談も受け入れている。

AWCが支援を行うのは授業実施期間中で、春・夏・冬の長期休業期間は行っていない。開室時間は平日の11時から18時で、授業時間枠に対応した1回45分の個別相談枠を、1日8つの時間帯で設けている。支援を行うチューターは、本学所属の大学院生で、青山AWCの場合2018年12月現在、和文の相談対応者14名、英文の相談対応者6名の計20名体制である。チューターの育成は、ライティング支援の専門家である著者らが担い、チューターとして一定水準のスキルの習得が確認されるまで、約1か月半におよぶ研修を行っている。この研修期間中だけではなく、晴れてチューターとして学生相談対応をするようになった後も、著者らがファシリテータとなって支援を振り返るミーティングを開催し、先述したAWCとしての理念、支援方針および方法の共通理解、支援の質の保証（たとえば、チューターのスキルの均質化、共通テキスト等の支援ツールの開発、支援者間での支援内容の共有、引き継ぎの仕組みづくりなど）をはかっている。

支援対象者は、本学の正規課程に在籍する学士課程学生、大学院生である。支援対象の文章は、日本語あるいは英語で書かれたレポート、論文、発表資料（レジュメ・スライド）など、学術的文章を主としている。

では実際に、どのような学生が、どのようなタイプの相談文章のために青山AWCを利用するのか。そして、そうした学生からの相談に対して、青山AWCではどのような支援を行っているのか。これらの点につ

いて、次章以降でデータを示し論じていく。

2. データと分析

2.1 対象データと分析方法

本稿における分析対象、分析対象期間、問いおよび分析方法は、以下のとおりである。

まず、分析対象は、青山AWCに訪れた学生に対する個別相談の内容について、支援後に都度チューターが記録として残す「支援履歴」とする。次に、その対象期間であるが、青山AWCで支援を開始した2017年11月21日から2018年11月20日まで、ちょうど丸1年間のデータを分析範囲とする。最後に、本稿の問いであるが、「青山AWCではどのような支援を行っているのか」という点について、その特徴を支援履歴の分析から描き出すことを目指す。裏を返せば、「どのような支援を行う必要がある学生からの相談が、青山AWCで生起しているのか」という点を分析することとなる。

以上の分析を通して、ライティングセンター運営上の現状と課題を考察することを本稿の目的とする。

2.2 分析：利用に関する基礎データを中心に

本節では、青山AWCの利用状況を概観するため、基礎データを表に整理し提示しながら、分析を行う。

表1. 年間利用件数（月別）

	4月	5月	6月	7月・8月	9月	10月	11月	12月	1月	合計
開室日数	5	20	21	21	5	22	20	16	11	141
利用件数	27	74	52	111	21	61	48	32	18	444
1日平均	5.4	3.7	2.5	5.3	4.2	2.7	2.4	2.0	1.6	3.2

表1は、青山AWCの立ち上げから1年間の利用件数について、月別に整理したものである。2月、3月は閉室期間のためデータはなく、8月は開室日数が1日であったため、7月と合算の数値とした。ここでは利用者数ではなく、利用件数としている点に注意が必要である。この利用件数は、45分の個別相談（セッション）を1回利用したことをもって、1カウントとしている。1年間の利用のうちには、2セッション連続（90分）となるケースも見られたが、その場合は2件とカウントした。年間の総利用件数は444件で、開室日数で割った1日平均の利用件数は、3.2件であった。

表2は、年間の利用件数を学年別に示したものである。年間で利用件数をもっとも多かったのは、学士課程1年生であった。次に多かったのは4年生で、2年生、3年生、大学院生の利用は、それぞれ全体の10%

未満にとどまった。大学院生については、修士課程と博士課程を合算した数値を表では示したが、39件の利用のうち約9割（35件）は修士課程の院生であった。

表2. 学年別の利用件数（N=444）

	度数	割合
1年生	262	59.0%
2年生	42	9.5%
3年生	29	6.5%
4年生	72	16.2%
大学院生	39	8.8%

表3. 一利用者あたりの利用回数（N=194）

利用回数	1回	2回	3回	4回	5回	6回	7回	8回	9回	10回	11回	12回	13回	14回	15回	16回	17回	18回	19回	合計
度数	103	42	16	14	7	3	1	1	4	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	194
割合	53.1%	21.6%	8.2%	7.2%	3.6%	1.5%	0.5%	0.5%	2.1%	0.5%	0.5%	0.5%	0.5%	0.5%	0.5%	0.5%	0.5%	0.5%	0.5%	100.0%

表3は、年間の利用を回数ごとに整理したものである。この数の合計が実利用者数ということになる。年間の利用者は194名で、そのうち1回のみの利用者が103名（53.1%）、2回以上の複数回利用者が91名（46.9%）であった。一人あたり平均2.29回利用したことになる。3回以上の利用者が全体の25%近くを占め、19回も利用した学生が最多であったことから、熱心にリピート利用する学生が、比較的多く見られたことがわかる。

表4. 相談文章タイプ別の利用件数（N=444）

相談文章のタイプ	度数	割合
レポート(日本語)	266	59.9%
レポート(英語)	59	13.3%
論文(日本語)	39	8.8%
論文(英語)	22	5.0%
発表資料(日本語)	13	2.9%
発表資料(英語)	7	1.6%
その他(日本語)	42	9.5%
その他(英語)	2	0.4%

表4では、相談文章のタイプ別の利用件数を示した。アカデミックライティングセンターという名称からもわかるように、AWCでは学術的な文章作成を支援対象の中心に据えているが、レポート、論文、発表資料

（レジュメ・スライド）に関する相談が、全体の約90%を占めた。「その他」の相談文章としては、大学院生および大学院進学希望者の研究計画書、ゼミやインターンシップ、留学に関する志望理由書などが挙げられる。

相談文章の言語別に見ていくと、日本語の文章（和文）の相談が360件（81.1%）、英語の文章（英文）の相談が84件（18.9%）であった。しかし、この数値に関しては留保が必要である。というのも、英文の相談に対応可能なチューターの確保がとくに2018年度前期は困難を極め、利用者に提供できた相談枠数に日英の言語間で差があったためである。

表5. 課題提出までの残り日数（N=444）

提出までの残り日数	度数	割合	累積割合
あと0日	74	16.7%	
あと1日	84	18.9%	35.6%
あと2日	38	8.6%	44.1%
あと3日	48	10.8%	55.0%
あと4日	25	5.6%	60.6%
あと5日	14	3.2%	63.7%
あと6日	8	1.8%	65.5%
あと7日	27	6.1%	71.6%
あと1週間から2週間	42	9.5%	81.1%
あと2週間から1か月	40	9.0%	90.1%
あと1か月から2か月	14	3.2%	93.2%
あと2か月以上	23	5.2%	98.4%
締め切り後	7	1.6%	100.0%

表5は、「課題の締め切りまで残り何日あったなかで青山AWCへ相談に訪れたのか」を示したものである。表内の「累積割合」によると、約半数の55%の学生は、締め切りまで残り3日以内の課題を抱えて相談に訪れたこととなる。その一方で、提出まで1週間以上ある段階で相談に訪れた学生も全体の約20%近くを占めた。「締め切り後」に利用した学生が少数ながらいた点も特徴的であった。これは、授業課題のレポートを提出した後、教員からのフィードバック（評価・コメント）を踏まえ、次回の課題ではより良いレポートを執筆するべく、返却されたレポートの反省をするために青山AWCを利用した学生がいたことを示す。

表6では、学生からの相談に対して、チューターがどのような支援を行ったのかを示した。ここでの数値は、チューターが個別相談を終えた直後に、担当した学生の相談に対して、「どのような支援を行なったのか」を尋ねる設問において、予め用意した12の選択肢（複数回答可）から選んだ記録をもとに、件数が多かった順に整理したものである。

表 6. 支援内容 (N=444)

	支援内容	度数	割合
1	文章の構成①(序論・本論・結論など、課題に対して適切な形で文章全体が書かれているか)	252	56.8%
2	課題内容(授業概要・出題意図)を把握・理解できているかの確認	214	48.2%
3	文章の展開②(文章全体の流れ、段落間のつながり、文と文のつながりなど)	210	47.3%
4	本文への引用の仕方(地の文との区別、出典の明記)	182	41.0%
5	参考文献一覧の書き方、注釈の使い方	181	40.8%
6	文章の構成②(問い・主張・論証部分が、適切に書かれているか)	163	36.7%
7	文章表現①(キーワードの定義づけ、日本語or英語の文法・語法など)	158	35.6%
8	文章の展開①(序論と結論の対応関係、引用文と自論のつながりなど)	135	30.4%
9	課題提出までのスケジュールニング	111	25.0%
10	情報検索(文献の探し方、借り方、読み方)	94	21.2%
11	段落の作り方 / パラグラフライティング	85	19.1%
12	フォーマット(フォントサイズ、インデント、記号の使い方など)	38	8.6%

表 6 によれば、最も多かったのは、「序論・本論・結論など、課題に対して適切な形で文章全体が書かれているか」という、文章の構成に関する支援であった。年間の利用件数の 56.8%にあたる個別相談において、文章の構成に関する検討および確認を、学生とチューターの間で行う必要があったということである。

次に多かったのが、「課題内容(授業概要・出題意図)を把握・理解できているかの確認」であったことは、意外に思われるかもしれない。しかし、これら 2 点が上位を占めたことは、青山 AWC を利用した学生の実像をよく表しているといえる。端的に言えば、大学生として求められるレポートや論文では、何を、どのように書けばよいのかがわかっておらず、その点を教わる、あるいは確認するために青山 AWC を訪れた、という学生が大勢を占めるのが実情ということである。

一方で、「情報検索(文献の探し方・借り方・読み方)」が支援内容の下位に位置づいている点には、大学図書館と連携してライティング支援を進めている運営体制上の事情が、少なからず関係していると考えられる。この大学図書館と青山 AWC の協働によるライティング支援の詳細は拙稿に譲るが、青山 AWC では、たとえば、レポート・論文で使える学術的情報が載っているサイト(OPACやCiNiiなど)の紹介、そこにアクセスする手順の支援は行う。しかし、専門的で高度な情報検索までは青山 AWC では深追いせず、図書館レファレンスにつなぐ。そして、情報検索後に取り寄せた文献をいかに学術的な文章作成において活かすか、という点は青山 AWC で支援する[4]。このように、青山 AWC では大学図書館との行き来を繰り返す利用を推奨しているが、それは、ライティングのプロセスにおいて、支援者(チューターだけではなく図書館職員も含む)のライティングに関する専門性を最大限活かすため、支援負担の分散をはかるため、他者との交流の機会を多くもつこと自体がライティングの成果物の客観性を高めることにつながるため、などの理由による。

この点を踏まえ、学生がどのように青山 AWC を利用しているか、という視点で改めて表 6 を見ると、「本文への引用の仕方」や「参考文献一覧の書き方、注釈の使い方」が支援内容の上位に位置づいていることから、上述したような大学図書館との役割分担が浸透しつつあるとみることができるとは思えないだろうか。

3. 考察: 青山 AWC 運営上の現状と課題

3.1 年間の利用状況に関する他校との比較

前章でデータを示したとおり、青山 AWC の立ち上げから1年間の利用は、件数にして 444 件、実数にして 194 名であった。この数値は、国内における先進的なライティングセンターと比較すると、どのように位置づけられるのだろうか。

表 7. 他大学ライティングセンターにおける実質 1 年目の利用状況

大学名	支援対象者	対象者数	利用件数	対象年
関西大学(私立)	学部生	約28,000	376 (年間)	2011年-2012年
広島大学(国立)	学部生 大学院生	約14,000 約2,400	160 (後期のみ)	2013年-2014年
青山学院大学(私立)	学部生 大学院生	約16,000 約1,500	444 (年間)	2017年-2018年

表 7 は、該当データを第三者が入手可能な形で公表している大学が極めて少ないなか、国内他大学ライティングセンターにおける実質 1 年目の利用状況を引用し、本学のそれと併記したものである[5][6]。ライティングセンターを評価するにあたり、利用件数の多さが決してすべてではないことはもちろん、対象者数などの条件面の違いにも十分に留意したうえで数値を見ていく必要はあるが、青山 AWC の実質 1 年目の利用件数は、他大学と比べ出色の数値であることがわかる。

今後も一定水準の支援の質を担保したまま、支援対象者数に占める利用件数ないし実数(利用者数)の割合をいかに増やしていけるかが課題である。

続いて、年間の利用状況の推移からその傾向の特徴を見ていく。図 1 では、青山 AWC のデータと、参照データとして第一著者の前任校である関西大学ライティングラボ(以下、関大ラボ)のデータを引用した[7]。ここでの数値は、月単位の日平均の利用件数である(関大ラボ: 点線、青山 AWC: 実線)。なお、関大ラボのデータは青山 AWC の条件と揃えるため、同大学が支援対象を全学部に広げた初めての年である 2013 年度のものとした。年間の開室日数の合計は、関大ラ

ボが 144 日、青山 AWC は 141 日とほぼ同数で、両大学のひと月あたりの開室日数もほぼ同数に揃えるため、4 月と 5 月（関大ラボは計 32 日：青山 AWC は計 25 日）、7 月と 8 月（同、19 日：21 日）、9 月と 10 月（同、23 日：27 日）は合算した数値を図 1 では示している。

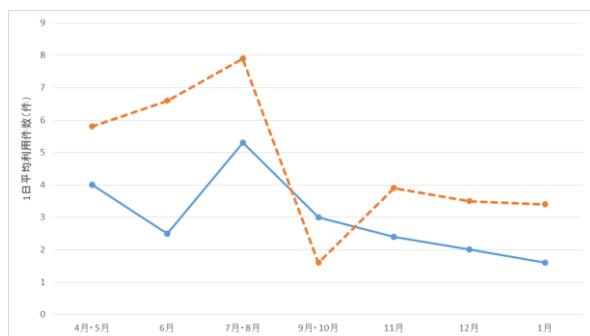


図 1. 年間利用件数（1 日平均）の推移
（点線：関大ラボ、実線：青山 AWC）

ここで注目したいのは、折れ線グラフの形である。利用件数の推移を示す同グラフの形の類似性から、ライティングセンターの年間を通した利用に見られる特徴的な傾向として、次の 4 点を挙げるができる。

第一に、新年度はじめ（4 月・5 月）は、年間を通してみると相対的に利用が多い時期である。第二に、利用のピークは前期（春学期）末（7 月・8 月）である。第三に、夏休みを挟み後期（秋学期）に入ると、利用が顕著に減少する。第四に、後期（秋学期）の利用は、総じて前期（春学期）に比べ低調で、伸び悩む。

とくに第三の点は、入学当初は緊張感や期待感をもっていた学生の多くが、成績評価のフィードバックを経験することで、いい意味でも悪い意味でも「このくらいでいいのか」と程度を知ってしまうことが背景にあることが、ライティングセンターを利用する学生の様子から窺える。大学生の授業内外における学習に対する意欲・姿勢の変化という意味で、ライティングセンターだけの課題というよりは、日本の各大学が抱えるより大きな課題といえるのかもしれない[8][9]。

こうした年間の利用状況の推移は、もちろん年によって多少の違いを見せることもあるが、ライティングセンター運営者の経験側からしても、ほぼ同様の傾向を示すことが多い。したがって、ライティングセンターの運営を担う者にとっては、まずは自大学の年間利用状況のデータを取りつつその推移の傾向を見据えたうえで、たとえば、年間で利用が落ち込む傾向にある時期に、利用促進のための広報活動や授業担当教員・関連他部署（図書館や教務課など）との連携を強化す

るなど、緻密な運営を展開していくことが肝要となる。

3.2 利用のされ方から見える運営上の課題

表 8 と表 9 は、相談文章のタイプ、学年、利用月の 3 重クロスをかけ、前期と後期に分けて利用件数を整理したものである（N=444）。なお、件数が少なかった「発表資料」の表示は、紙幅の都合で割愛している。

表 8. 相談文章のタイプ×学年×利用月（前期）

		4月	5月	6月	7月・8月	合計	割合
レポート	1年生	23	58	43	63	187	42.1%
	2年生	0	2	1	16	19	4.3%
	3年生	0	1	4	3	8	1.8%
	4年生	0	0	1	8	9	2.0%
	大学院生	1	2	0	9	12	2.7%
論文	1年生	0	0	0	0	0	0.0%
	2年生	0	0	0	0	0	0.0%
	3年生	0	0	0	0	0	0.0%
	4年生	0	0	0	2	2	0.5%
	大学院生	0	2	0	0	2	0.5%
その他	1年生	2	1	0	5	8	1.8%
	2年生	0	0	0	0	0	0.0%
	3年生	0	1	1	0	2	0.5%
	4年生	0	0	1	0	1	0.2%
	大学院生	0	0	0	0	0	0.0%

表 9. 相談文章のタイプ×学年×利用月（後期）

		9月・10月	11月	12月	1月	合計	割合
レポート	1年生	40	11	3	3	57	12.8%
	2年生	7	4	1	0	12	2.7%
	3年生	1	2	1	6	10	2.3%
	4年生	1	2	0	2	5	1.1%
	大学院生	2	1	0	2	5	1.1%
論文	1年生	0	0	0	0	0	0.0%
	2年生	0	0	0	0	0	0.0%
	3年生	0	0	3	2	5	1.1%
	4年生	12	8	21	2	43	9.7%
	大学院生	1	7	1	0	9	2.0%
その他	1年生	6	0	0	0	0	1.4%
	2年生	5	4	0	0	9	2.0%
	3年生	0	0	0	0	0	0.0%
	4年生	2	6	4	2	14	3.2%
	大学院生	2	2	0	0	4	0.9%

これらの表からは、相談文章のタイプと学年が、利用時期によって変化していることがわかる。前期は、1 年生の「レポート」の相談が中心である。後期もその傾向は続くが、前期に比べて、4 年生の「論文」の相談数が増加する。これは、夏休みが明けた頃から提出締め切りが迫る 12 月や 1 月にかけて、4 年生の卒業論文の相談利用が増えるためである。なお、「その他」も後期に増加しているが、その内訳としては、2 年生の「ゼミの志望理由書」、4 年生や大学院生の「研究計画書」、「留学関連の書類」に関する相談が挙げられる。

このような利用傾向を踏まえると、大学全体におけるライティング教育実践の動向（たとえば、授業ではいつ、どのような課題が学生に提示され、締め切り時期はいつ頃なのかという点）や、コスト（たとえば、

人件費をはじめとする運営費)との兼ね合いで、「いつ、どれくらいの相談対応枠を配分するか」という点は、年間を通して常に視野に入れ考慮しなくてはならない、ライティングセンター運営上の課題といえる。

4. おわりに

4.1 本稿の結論

本稿では、「青山AWCはどのような相談で、学生によって利用されているのか」、そうした相談に対して、「青山AWCでは、どのような支援を行っているのか」という表裏をなす問いを立て、量的データの分析にもとづき、ライティングセンターを運営する立場から、立ち上げから1年間の現状と課題について考察してきた。現状、先行する国内他大学のライティングセンターの利用に関する数値、傾向と比較して、青山AWCは、まずは順調な立ち上げ期を経てきているといえる。

一方で、運営上の課題は、次の2点に整理できる。1点目は、中・長期的な視野で利用を拡大し、その規模を維持・安定させていくために、授業担当教員や関連他部署(図書館や教務課など)との間で、学生のライティングに関する相補的な協力関係を構築していくこと。2点目は、実際の利用者の相談内容をデータにもとづき分析する一方で、そうした利用者のニーズに対して、「いつ、どれくらいの相談対応枠を配分するか」、大学全体における授業でのライティング教育実践やコストとの兼ね合いを、年間を通して視野に入れながら考慮すること。以上が、本稿の考察を通して明らかとなった、ライティングセンター運営上の課題である。

4.2 今後の検討課題

最後に、本稿では議論しきれなかった研究上の今後の課題について述べる。立ち上げから1年の現時点では、データの蓄積という意味での限界もあり、支援内容の多角的な検討までは踏み込めなかった。引き続きデータの収集に努め、経年変化も視野に入れた支援内容の分析を進めていきたい。青山AWCでは、量的データだけではなく質的データも、支援開始以来、蓄積している。今後も、量的・質的両方のアプローチからライティングセンターに関する事象を実証的に研究し、その学術的成果を広く国内外に発信していきたい。

参考文献

- [1] 青山学院大学アカデミックライティングセンター, 2018, 「センター理念」青山学院大学アカデミックライティングセンターホームページ, (2018年12月20日取得, <https://www.agulin.aoyama.ac.jp/ja/writingcenter>)
- [2] 佐渡島紗織・太田裕子, 2013, 『文章チュータリングの理念と実践, 早稲田大学ライティング・センターでの取り組み』ひつじ書房.
- [3] 飯野朋美・稲葉利江子・大原悦子, 2015, 「個別相談とライティング支援の可能性ー津田塾大学ライティングセンターの活動分析から」『津田塾大学紀要』第47巻, 133-148.
- [4] 小林至道・中竹真依子・天野朗子・近藤泰弘, 2018, 「大学図書館とライティングセンターの協働による効果的なライティング支援」『第66回日本図書館情報学会研究大会発表論文集』日本図書館情報学会, 5-8.
- [5] 上田大輔・尾崎文代・高橋努, 2017, 「大学図書館の機能を拡張し発展させる広島大学ライティングセンターの取り組み」『大学図書館研究』第105巻, 75-84.
- [6] 西浦真喜子・小林至道・毛利美穂, 2017, 「Ⅲ. 関西大学ライティングラボの取組」『2012年度採択文部科学省大学間連携共同教育事業〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング/キャリア支援』2016年度報告書, 関西大学・津田塾大学, 25-47.
- [7] 西浦真喜子・小林至道・林田定男, 2014, 「Ⅲ. 関西大学ライティングラボの取組」『2012年度採択文部科学省大学間連携共同教育事業〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング/キャリア支援』2013年度報告書, 関西大学・津田塾大学, 23-38.
- [8] 吉見俊哉, 2018, 「大学の不条理と未来 単線から複線へ」, 『現代思想』2018年10月号, 8-17.
- [9] 溝上慎一, 2018, 『大学生白書2018 いまの大学教育では学生を変えられない』東信堂.
(2018年12月21日受付, 2019年2月14日再受付)

謝辞

本研究は、AOYAMA VISION の成果の一部である。